

氏名	アキタ ユミ 秋田 由美
所属	人間健康科学研究科 人間健康科学専攻
学位の種類	博士（看護学）
学位記番号	健博 第128号
学位授与の日付	平成29年3月25日
課程・論文の別	学位規則第4条第1項該当
学位論文題名	小児がんにより長期入院している学童・思春期の子どもの気持ちに対する看護師の理解と関わり
論文審査委員	主査 教授 飯村 直子 委員 教授 習田 明裕 委員 教授 西村 ユミ 委員 教授 草柳 浩子（上智大学）

### 【論文の内容の要旨】

#### 1. 背景

近年、小児がんの子どもの看護においては、気持ちを理解していない看護師の対応を子どもが問題として捉えていることが明らかになっており（前田貴彦, 藤原, 上杉, 杉野, 平田, 2010）、子どもの気持ちを理解できていない現状がある。また、看護師が学童・思春期の子どもの気持ちの理解や代弁を困難だと認識している（三澤, 内田, 竹内, 2007）ことも明らかになっている。しかし、看護師がどのように子どもの気持ちを理解し、関わっているのかを明らかにした研究はほとんど見当たらず、研究の必要性が高いと考えた。

#### 2. 目的

小児がんにより長期入院している学童・思春期の子どもの気持ちを看護師がどのように理解し、関わっているのかを記述することを目的とした。

#### 3. 研究方法

Leininger の民族看護学を参考に関東地方にある総合病院の小児科・小児外科病棟でフィールドワークを行った。この病棟に勤務し、研究テーマに詳しい6名の看護師を主要情報提供者、それ以外の看護師10名と6～15歳の小児がんで1ヶ月以上入院している子ども8名を一般情報提供者とし、看護師にはインタビューを行った。データ分析は、まず研究目的に関連付け、文脈に沿ったテーマを明確化し、そのテーマ間の類似性や関連性等を考慮してテーマをさらに抽象化した主要テーマを抽出した。倫理的配慮として、平成26年度首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認（番号：14065）と対象施設の研究倫

理委員会の承認を得て行なった。

#### 4. 結果

小児がんのために長期入院している学童・思春期の子どもに対し、看護師がどのように気持ちを理解し、関わるのかを表す以下の6つの主要テーマが抽出された。

##### 1) 主要テーマ1：子どもの生活にアンテナを張り、その暮らしさを捉える

看護師は、子どもの様子、反応を注意深く見て、その場面から得られる情報の全てを捉えようと「アンテナ」を立て、子どもの性格、行動特性、雰囲気など、その子どもの「キャラクター」を捉えようとしていた。そして、「余計な話」をすることで、その子どもの「キャラクター」や好み等を共有していた。

##### 2) 主要テーマ2：学童・思春期の見えにくい「子どもの世界」を知る

看護師は、子どもが入院する前の子どもの生活、入院中も続いている仲間関係、子どもが考えている自分の将来等の「子どもの世界」も知ろうとしていた。それは、年齢的な特徴から見えにくくなっていたが、看護師は子どもが自ら話すように促したり、子どもと関わる多くの人と情報共有をして子どもが持つ様々な面を知ろうとしていた。

##### 3) 主要テーマ3：子どもが「話しても良いかな」と思える人になる

看護師は、子ども自身が気持ちを表現することを大切にし、子どもが気持ちを語ってくれるような関係性を作ろうとしていた。そのために、「この人、私のことを分かってる」と思ってもらえるようにアピールしたり、子どもが話しやすい「余白の時間」に子どもと話す時間を持つ等をしていった。

##### 4) 主要テーマ4：子どもが子どもなりに考えて発信できる機会を作る

子どもは大人ばかりの環境の中で、自分の意見を言えなくなったり、社会性の未熟さから自分の気持ちをうまく表現できないことがあると看護師は考えていた。そのため、子どもが発言する機会を作って、子どもの表現する力を育てていた。また、子どもの意見を取り入れてケアや問題解決を行い、子どもの発言意欲も育てていた。

##### 5) 主要テーマ5：覚悟を決めて子どもからのサインを待つ

看護師は、子どもが「何か言いたそうだな」と感じた時には子どもと二人きりになって何もしない「余白の時間」を持つなどして、子どもが話すのを待っていた。特にターミナル期や子どもの体調が悪化している時には、経験の浅い看護師も「アンテナ」を張って、「子どもが何か言いたそうな感覚」を感じられるように、先輩看護師が促していた。

##### 6) 主要テーマ6：ポロっと出てきた子どもの言葉を取り逃がさずに動き出す

ターミナル期には最期までその子どもらしく過ごすことが意味のあることだと考え、子どもの希望が分かった時には、ありとあらゆる手段を使ってやれることはやっていた。また、ターミナル期にある子どもはこれまでと違う体調の悪さ等に必ず疑問を表出するため、家族や医師を巻き込んで子どもの疑問に答えようとしていた。

#### 5. 考察

看護師は「子どもの世界」、特に仲間関係を知ること、病棟では見せない素直な子ども

## 博士学位論文内容の要旨

の願望や価値観、将来の夢等を捉えていた。「子どもの世界」を知ることが、子どもがその子らしく入院中からターミナル期までを過ごすために必要であった。また、看護師が子どもと話す「余白の時間」は、子どもが自由な関心に沿って話をできる時間と考えられ、子どもの視点で見た「世界」を知るために有効であった。さらに、記録では伝わらない「子どもの世界」や気持ちのニュアンスを共有するには、「余計な話」が重要であった。

また、看護師は子どもが自分のタイミングで気持ちを話すのを2通りの方法で待っていた。1つは子どもとの関係を築いたり、子どもが表現する力を育てるなど積極的に動きながら「待つ」関わりで、もう1つは、子どもの分かりにくいサインを取り逃がさないように待ち構える「待つ」であった。これらの子どもの気持ちを理解する関わりを看護師達は日常の中に埋め込み、経験の浅い看護師に伝えていた。